



Instagram



初めて聞く人にも 伝わる落語を届けたい

しょうよう
春風亭 昇羊さん

子ども落語教室「大府の笑学校」で3年間講師を務めた春風亭昇羊さん(35歳)。幼い頃からお笑い番組が好きで、漫才師の中川家・礼二さんの落語に感銘を受けたことをきっかけに落語家の道を志しました。

落語家になるには、真打という位の師匠への弟子入りが必要だと知ったのは21歳の頃。ネット検索で最初に目にした春風亭昇太さん入門しました。寄席で師匠の芸に憧れて弟子入りする人が多い中「現代っ子っぽいですよね」と笑います。

その後は、前座として落語の基礎や礼節を学ぶ日々。寄席の作法も分からず苦労する中、師匠の「やりたいうことを実現するには、やりたくないこともやらなければならない」という言葉が支えになったそうです。

落語には、昔から受け継がれてきた古典落語と、現代に創作された新作落語があります。前座時代の昇羊さんは自分の個性を表現するため、新作落語の創作に励んでいました。しかし、コロナ禍で客足が遠のいたことを機に、何を届けるべきか見つめ直します。そんな中、講談師・神田伯山さんが、当時まだ広くは知られていなかった講談の魅力伝える姿に刺激を受け「自分が新

作落語をたくさん作るより、お客さんに本当に面白い落語を見せることが大切だ」と考えるようになり、古典落語の面白さを自分なりに工夫して届けることへ、軸足を移しました。一方で、独自の考えや個性は書籍やSNSで表現しています。

昇羊さんが大切にしているのは、初めて聞く人にも伝わる落語。「僕自身、最初は分からない単語だらけでした」と振り返り、人物などに説明を加えて想像しやすくする工夫をしていると話します。古典落語は決まった型がある中にも、演じ手ごとに表現が変わるのが魅力の一つです。

大府の笑学校でも、生徒一人一人の自分なりの表現を大切にしてきました。大声で泣く演技が苦手な生徒にはすすり泣く演技を提案するなど、台本にとらわれず、工夫しながら表現する楽しさを伝えました。

27年4月には真打昇進を控える昇羊さん。「やることはこれまでの延長」と語り、今後も自分なりの落語を追求し続けます。



▲大府の笑学校の発表会で生徒たちと

cover

子ども落語教室「大府の笑学校」発表会を開催しました。高座に上がったこどもたちは、緊張しながらも、これまで練習してきた落語を堂々と披露。春風亭昇羊さんから学んだ話芸に、自分らしい工夫を交えた演目に、会場からは大きな笑い拍手が起きました。

